

図書だより

<第38号>

平成10年10月30日
呉工業高等専門学校
図書委員会



「未来の呉高専」－学生が構想した21世紀の呉高専キャンパスCG画像－
設計：佐川昌謙（28期卒業生）

中央に校舎のコアを集め、その中で研究棟と教育棟を分離し、明確な空間構成を配慮している。
コアの中には学生広場を設け、通常時の学生の交流や高専祭などのイベントにも対応している。

目 次

【巻頭文】

「読書の思い出」…………… 校長 長町 三生 …… 2

【読書感想文】

「マゼランが来た」(本多勝一著)を読んで …… A 1 米 司 晴 恵 …… 3

「竜馬がゆく」(司馬遼太郎著)を読んで …… M 1 松 井 瞬 …… 3

「注文の多い料理店」(宮沢賢治著)を読んで …… M 2 岩 見 謙一郎 …… 4

「友情」(武者小路実篤著)を読んで …… E 2 熊 谷 慎 吾 …… 5

「車イスから見た街」(村田稔著)を読んで …… A 3 松 尾 涼 香 …… 5

【随想】

「呉高専専攻科に入学して」…………… 専攻科 A 1 只 野 ユ キ …… 6

【新任教職員の随想】

「読書のすすめ」…………… 一般科目 赤池 祐次 …… 7

「読書のすすめ」…………… 一般科目 佐賀野 健 …… 7

「読書のすすめ」…………… 環境都市工学科 大東 延幸 …… 8

「図書館利用のすすめ」…………… 図書係長 板谷 茂 …… 8

【在外研究員だより】

「米国ボストン・MIT滞在記」…………… 環境都市工学科 小堀 慈久 …… 9

【留学生随想】

「呉高専の図書館」…………… M 5 モハマド・アジズル …… 10

【新着図書10選】 …… 10～11

【お知らせ】

1 平成9年度 図書館利用状況 …… 12

2 蔵書コーナー『学生相談室コーナー』の開設について …… 12

3 外国雑誌目次データベースのバージョンアップについて …… 12

4 一般公開実施規則の改正について …… 12

【編集後記】 …… 図書館長補 中迫 正一 …… 12

巻頭文

読書の思い出

校長
長町三生



「灯下親しむ」秋になりました。この言葉が生まれた時代はテレビもなく、秋になって日が長くなると、“本でも読むか”ということになり、「灯火親しむ」生活をするようになる。今日でいえば、「今日もテレビを見るか」といった調子であらうか。

最近の学生諸君はテレビづけの毎日か、あるいは本を手にしてもコミックものということになるのであろう。テレビもコミックも視覚的映像を主体としているので理解は早い。他方、書物は字をなぞりながらその裏にある状況をイメージ化するところに特色があり、脳に残る程度は読書の方がはるかに大きい。字を読みながらいろいろと推察したりイメージ化を行う。この際脳は想像をしながら、あるいは空想をしながら“考えている”のである。

テレビやコミックでも教えられる事柄はあると思うが、字を読むことを通じて多くの事柄を学ぶことができる。科学技術や自然界の法則、執筆者の人生観やものの考え方、あるいは世の中で生じた事柄などの出来事を通じて、いろいろ考えさせられる。この体験は脳のなかに蓄えられ、歳を取っても思い出され、ものの考え方に作用する。とくに青年期は感受性をもっとも高い時期なので、書物からえた知識は、脳の血や肉となって身につく。その蓄積が社会で活躍する際の基盤となる。

社会に出てみると、話題のない人とつき合うことはまったくつまらない。ビールを飲んでいても知識（話題）が次から次へと出る人の話を聞いていると、ついに吊り込まれて夢中になって話の中に入っていることがある。国際会議のパーティー

で、もっともつき合いのよくないのが日本人である。外国語ができないという面もあるかもしれないが、ブロークンイングリッシュでよい、とに角人の間に入りしゃべりまくるのが、人のつき合いである。

広島商工会議所会頭の橋口氏は、かの評判の悪い大蔵省出身者であるが、ワインの話になると、上品な手振りでわかりやすく実例を多く話してくれる。ついに深入りをし、自身もソムリエの勉強でもしようか、という気分させられてしまう。飾り気のない話し振りをみて、奥深い勉強をしたことを推察できる。

何でもよい。私の学生でアガサ・クリスティの推理小説を100冊読破したのがいた。いつもの話し振りも推理小説的に話すのには驚いたが、自分の趣味や好みに合う書物でよい。ただし、コミックものでないことを条件にしたい。多く読むことによって必ず自分の血や肉になっている。青年期では読書は多いほど望ましい。

私は18才のときに、1日1冊それを3ヵ月続ける決意をして開始したことがある。大学の図書館に閉じ込め、心理学の専門書だけを読破し、100冊までいったことを覚えている。今何という本を読んだかは覚えていないが、この読破の力はいまだに続いており、いわゆる本を斜めに読んで速読をすることができる。

今でも思い出すが、“100冊まで読んだ”という事実であり、これだけは誰にもひけをとらない自慢話として思い出となっている。

若い時期は2度と到来しない。若い時こそ思い切ったことをやってみてもよい。同じやるなら、自分のためになることに挑戦してみてもいいが。



読書感想文

「マゼランが来た」

(本多勝一著)

建築学科1年

米司晴恵



私は、この夏休みに「マゼランが来た」という本を読んだ。この本は、写真も多くて、けっこう読みやすくてよかった。

さて、本の内容は、一言でいえば、「マゼランは実は悪い人だった」というものだった。マゼランが立ち寄ったところに住んでいた先住民をマゼラン達が大虐殺した話や、その先住民達のその後、そして今どうなっているかということが書かれていた。

私はこの本を読むまで、マゼランという人は世界一周をしようとしたが、フィリピンの先住民に殺されてしまったということしか知らなかった。だから、マゼランが殺されたのは、かわいそうだと思っていた。けれど、今はそう思わない。マゼランは殺されて当たり前だと思っていた。マゼランたちは先住民たちを支配しようとしていたのだから。

最初にマゼランたちはリオデジャネイロに着いて、ツピナンバという先住民と出会う。ツピナンバとマゼランの関係は友好的だったらしい。だがツピナンバはポルトガル人に虐殺され、今は混血ばかりでツピ語を話せる人は誰もいない。ブラジルでは六百万人の先住民が殺されたという推計もあるらしい。すごく多くて信じられない。600万人というと、呉市の人口の30倍もあるのに!!しかも、10年前にも、白人農園主らが先住民を襲って27人を死傷させていて、現在も虐殺のような事が続いているのにも驚いた。

南米の他の先住民はどうなったかというと、ラプラタ川のチョンク人はマゼラン隊に2人捕虜にされた。マゼラン海峡辺りのフェゴ島のセルクナ

ム人はマゼラン隊とは会わなかった。チリ側パタゴニアの海洋民族ヤマナは一度は捕らえられるが、上手く逃げ出した。しかし、その後これらの民族は白人に大虐殺されている。セルクナム人の場合、住んでいた土地が羊毛に最適だったために、大虐殺された。しかもチリの展示場に、先住民狩りの写真が反省の説明もなく飾られているのはひどい。先住民たちは弓矢しかもっていないのに、白人たちは自分達の金欲のために鉄砲で打ち殺していき、こんな人間じゃないと思った。そのせいで、もうセルクナム人は一人もいないのだ。

この後、本にはマゼランが最後に上陸したゲームのチョモロ人のことが書かれている。

私は、マゼランが虐殺をした事や、その後も白人によって文化をなくした先住民の事を今まで知らなくてすごくはずかしいと思った。どの民族も信じられないくらいすごい殺され方をしているけど、セルクナム人の妊婦の耳は、お腹の胎児のえぐり出してとった耳と一緒に高い報奨額となるというのは、一番ショックだった。

最後に、私達はもっとこういう虐殺の歴史をしらなければならないと思う。

「竜馬がゆく」

(司馬遼太郎著)

機械工学科1年

松井瞬



自分は、坂本龍馬という人間がとても好きで、龍馬と名が付く本は立ち読みかすぐに買ってしまいます。「竜馬がゆく」という本は前から知っていたのですが、読む機会がなかったので、この休みを使って読み上げました。

第一印象として本の冊数が多いことにとてもびっくりしました。たった数年を活動期とした龍馬にとっては多いような気がしました。しかし、実際、

本を読むと、龍馬は全8巻にまとめきれないほどの大偉業を成し遂げた人なんだと改めて感じました。

本文の内容として一番印象に残っているのは、薩長同盟の時に、西郷隆盛と桂小五郎（後の木戸孝允）の会談のときです。両者とも自分の藩のプライドや立場を考え、

「同盟のことよろしくお願いします。」

と頭を下げることをせず、全然、会談が進んでいなかったときに龍馬がやってきて、その会談の状態をみてとても腹を立て、顔を真っ赤にして西郷の元へ怒鳴り込んでいった龍馬の言葉です。

「薩州も長州も関係なかろう。すべては日本のためじゃ。」

このときの人々は、自分の所属する藩のことしか考えていなかったのに、龍馬は日本人として、日本を考えていたのだと感心しました。

そしてもう一つ感心したことが大きな夢と壮大な計画です。大きな夢というのは、龍馬は大政奉還の立て役者であるのにもかかわらず、明治政府の役人にならずに、

「世界の海援隊でもやりますかな。」

という言葉に龍馬の大きな夢すなわち自分の大きな船で世界を駆けめぐるということでした。そして、壮大な計画というのは、大政奉還を始め、薩長同盟、亀山社中（海援隊）、各藩をスポンサーにした株式会社づくり、京都で暴れていた浪人に北海道の開拓の仕事を与え、そこを拠点に幕府を倒す計画、明治政府の原案にも使われた、船中八策などの大きな夢や計画に、龍馬についていく人は惹かれたのだと思います。

そして慶応3年11月15日坂本龍馬は京都で何者かに暗殺されました。剣豪としてはあっけない死に方だったのですが、龍馬の言葉の中にこんな内容があることを思い出しました。

「人は死ぬときには死ぬ。しかし、死ぬまでは一生懸命生きなきゃならん。」

「人生太く短く」という言葉がありますがまさにこの坂本龍馬のこのようだと思います。僕は、この生き方を見習い前向きで一生懸命生きていきたいと思います。

「注文の多い料理店」

（宮沢賢治著）

機械工学科2年

岩見謙一郎



僕はこの本を読んで改めて宮沢賢治の童話の奥の深さを知った。この物語は、狩猟にやってきた紳士二人が料理店に入り、店からの注文に従っていった結果、危なく食べられるところで助かったという話である。僕が最初読んだ時は、作者の言いたい事が分からなかった。もう一度読んでみたけれども、やはりよく分からない。そこで序の部分を読んでみた。序には、「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです」と書いてあった。これを読んだ時、僕は賢治が何を言いたかったかが分かったような気がした。この物語は一見紳士が主人公であるかのようだが、実は自然が主人公だったのだ。人間の立場で読むとよく意図がつかめないが、自然の側から見るとよく分かる。つまり、自然にとってみれば人間は自分たちの生命を奪う敵なのだ。自然の命は決して人間の命の価値に劣る訳ではない。むしろ自然の命の方が人間に比べて勝っているし、偉大である。それなのに人間は利潤追求や趣味のために鳥や獣を殺し、自然を奪う。自然が人間に気持ちを伝える事ができないと思う人もいるだろうが、僕は人間が自然の叫びを受け止めることができないのだと思う。心から自然を愛し、共に暮らしてきた賢治は、この童話を通じて多くの人間たちに自然の叫びを伝えたかったのではないだろうか。もう一つ気付いた事がある。賢治がこの物語を書いたのが25歳の時。この頃の農民の生活は貧しかったが、一方では狩りを楽しむことができるほど裕福な人もいた。その人達は農民の貧しい生活など関係なしに自分の好きなことをしていた。そういう人達に対する意味も込めて賢治はこの物語を書いたのではないかと思う。賢治の童話は本当に内容が濃い。僕はまた他の作品も読みたいと思う。

「友情」

(武者小路実篤著)

電気工学科2年

熊谷慎吾



「車イスから見た街」

(村田稔著)

建築学科3年

松尾涼香



脚本家の野島は、ある日、杉子という友人の従姉妹に一目惚れをする。野島は親友である大宮にことあるごとに相談を持ちかけるが、杉子と親しくなっていくうちに、杉子の気持ちが自分ではなく大宮に向けられていることに気付く。しかし野島は思いきって自分の「結婚したい。」という思いを杉子に手紙で伝えるが、杉子はパリに渡った大宮に手紙を送り、大宮を追ってパリへ行ってしまふ(あらずじ)。

一見、恋愛がテーマであるかのような物語であったが、よく味わって読んでみると、終始、野島も大宮も、自らの内にある薄黒い感情に迷いながらも、真に互いを尊敬し、励まし合う気持ちがあることが見てとれた。結局、最後まで親友である野島を気遣い続けた大宮が、その優しさ故に皮肉にも杉子に恋されてしまったのだが。

自分には親友がいる。男にも、女にも。もし、親友と一人の女性を好きになってしまったら、と読んでいる最中、目を空にやって幾度となく考え込んでしまった。自分はどうも楽道家なので、いつも「そのとき考えればいいか。」という処に結局いつも行きついてしまう。だがやはり、大宮のような振る舞いは自分にはできないだろうと思う。親友をみくびっているわけではない。尊敬も、信頼もしている。むしろだからこそ、そんなときは正面を切って親友と話し合い、自分達なりに決着をつけるだろう。そんなことで自分達の関係も気まづくなったりはしないだろう。今の友とは、そのくらいのことはいえる自信があるつき合い方をしている。

もちろん普段は馬鹿をやってもいるが、互いに尊敬できる部分はある。少なくとも自分は友をいろんな意味で尊敬している。これから、どんなことが起こるかは分からないけど、互いを理解し、話し合おうとする気持ちは、いつまでも持っておきたい。

突然、両足が動かなくなった。

あなたは、こんな夢を見たことはありませんか。夢からさめて、自分の両足にそっとさわって、動かしてみる。動いた。よかった。ああ、夢でよかった。ほっと、胸をなでおろす。

あなたは、こんな経験がありませんか。

私の人生は、そんな夢がさめないままではじまったのです——。

著者の村田稔さんは、この本をこのようにはじめています。

村田さんは一歳半の時に脊髄性小児麻痺(ポリオ)による両下肢弛緩性麻痺によって歩くことはもちろん、立つこともできなくなってしまいました。しかし彼自身はまだ小さすぎてそんなことは覚えているはずありません。気がついたときには足が動かなくなっていたわけですから「海辺の白い砂浜を素足で踏みしめる感触はいいものですよ」と言われても、頭の中ではその感じがわかったとしても、自分自身の感触としてはわからないのです。村田さんは、足が動くことの素晴らしさも知らないかわりに、足が動かないことの悲しみも知らなかったのです。しかしだんだん成長していくにつれて、自らの障害を認識していきます。

高校入学の際、村田さんは公立高校から入学を拒否されました。“差別”の一文字が村田さんの混乱した頭の中で鮮明だったといいます。おそらくその時のことを彼は生涯忘れることはないでしょう。

足が動かなくて一番困ること——。それは“移動”です。そして移動するためには何らかの“道具”を使うことになります。その“道具”には乳母車、リヤカーを改造した手こぎの三輪車、補装具、車イスなどがあります。現在弁護士となった村田さんは補装具と車イスを使って仕事をして

います。しかし、実際にそれらで移動するときの難問が、“段差”や“傾斜”，そして“道の状態”です。少し前に、私は車イスに乗った人が三段ほどの階段を他の人に押ししてもらってのぼっている光景を目にしました。端から見てもその作業は大変そうでした。あの階段がスロープだったらもっと楽に行くことができるのになあ、と私は思いました。ほんの少し段差があったり、小石が多かったりするだけで、行く手を阻まれてしまったり、怖い思いをしたりするのです。私達は車イスに乗っている人が困っている場面に遭遇したら、助けたいと思っても車イスの操作がわからなかったり、「手伝いましょうか？」の一言を言うタイミングを外してしまい、通り過ぎてしまうことがあります。それは車イスに乗っている人にとっても同じで、そこら辺を歩いている人に「手伝ってくれないですか？」と声をかけるのはなかなか勇気のいることのようにです。

その他にも、車イスで生活していく上で不便なことがたくさんあると村田さんは言っています。普段何気なくそれらを利用している私達がそのことに気づくことはなかなかありません。駅での移動、ホテルのお風呂、電話ボックス、コピー機などの利用、自動販売機…、数えればきりがありません。それは私達の身の回りにあるもののほとんどが、普通に自分の足で立って歩ける人を基準にしているためです。車イスに乗った人達の立場になってももの幅、高さ、広さを考えれば、彼らにとってもっと生活のしやすい環境に変えてゆけることができるでしょう。

私は現在高専の建築科で勉強していることもあって、将来は建築関係の仕事に就くことになるかもしれません。その時は村田さんをはじめ“さめない夢”の中にいるあらゆる障害を持った人達が今よりもっと暮らしやすい環境、また社会を築くのに貢献していきたいです。そして、町中で車イスに乗った人が困っている姿を見ることがあったら、臆することなく手伝ってあげたいと思います。

随 想

呉高専専攻科に入学して

専攻科 建設工学専攻1年

只 野 ユ キ



私は今年4月に、石川高専の建築学科から呉高専専攻科建設工学専攻に入学しました。

私の住んでいた高岡は平野の中に家が建っているというのが当たり前の光景であったのに対して、呉は山の斜面にまで家が建っているという光景が広がっており、すごく驚きました。

現在、日本は高齢化社会を迎え、都市計画にもこれによって生じるであろう問題点を考慮しておく必要があります。将来、建築の仕事に携わるに当たり、社会にでる前に高齢化社会を考慮した、安全でゆとりがある設備、都市基盤についてさらに研究してみたいと思うようになりました。呉高専専攻科が設置されたことを知り、自分が考えていたテーマの研究ができると思い、入学を決めました。

今は1ヶ月の学外実習が終わり、ほっと落ち着いた時期です。学外実習では府中町地区別住宅事情についてデータをもとに分析し、その後現地調査を行いました。現地調査では、新都市計画法施行(1968年)以前、以降に建てられた団地の道路幅、公園規模等の比較・検討を行いました。この学外実習を通して、パソコンの表計算ソフトの使用方法及び作図方法を学び、また街の見方を教えていただきました。この学外実習は、授業とは異なる非常に有益な経験となりました。

呉高専専攻科は研究を主体としたカリキュラムが組まれており、1年生後期から本格的な研究が始まります。特別研究では「イギリスにおける都市再生策に関する研究」をもとに、日本の現状にあわせて、これからの日本のモデルとなるような、独創的な研究を行いたいと思っています。

新任教職員の随想

「読書のすすめ」

一般科目

赤池 祐次



偉ぶって、いかに読書すべきか、などと書こうと思いましたが、たいして本を読んでいないし、文章まとめる能力もないので、面白いと思った本の紹介をします。本を読むことは楽しく、また楽しいから本を読む。それで十分だと思います。

まず、藤原正彦著「若き数学者のアメリカ」。数学者である著者が、研究員として招かれたアメリカでの体験記です。故新田次郎の息子であることがうなずける、ぐいぐい読ませる文章が魅力的です。周りが外国人ばかりの真珠湾で「急性愛国病」にかかったり、ストリーク（裸で走り回る）をしたときの話など、著者といっしょに怒ったり笑ったりできます。

次は、秋山仁著「数学流生き方の再発見」です。著者は長髪バンダナのヒゲ先生で有名ですが、この本では「男はつらいよ」の寅さんが登場し、実は彼がすばらしい数学的発想を持っていることを分析し、その発想で数学の問題を実際に解いていきます。教育に対しての著者の言動に対してはいろいろ意見もありますが、「数学ってこんなに面白いんだよ！」というエネルギーには頭が下がります。私も見習わなければと思います。

数学者の本ばかりになります。広中平祐著「学問の発見」。数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞を、日本人としては2番目に受賞した著者が、若い人に向けて自分の半生を語った本です。タイトルが大きくて肩が凝るような感じですが、そんなことはまったくなく、親しみのある明解な文章です。人はなぜ学ばなければならないのか、より素晴らしく生きるにはどうしたらいいのか、誰でも一度は考えるこれらの疑問を解くためのヒントが書いてある本だと思います。

何度も読み返す本がある人は幸せです。若い時にそんな本をたくさん見つけ出せたらいいですね。

「読書のすすめ」

一般科目

佐賀野 健



「読書のすすめ」といっても、私に言えるのは「読書とはたった一冊の本を読むことから始まる（八ッ塚実『学級記録』より）」ということです。「友人や先生にすすめられた」「新聞や雑誌の広告で見た」「本屋の店頭で目についた」「本の表紙が気に入った」など、とにかく理由は何でもよいのです。

「読書」とは本を読むことなので、「本を読むこと」がその出発点です。話はそれからです。1冊の本を読んで感動した（心が暖かくなった、勇気がでた、また読みたくなった）人は、その本をもとに次に読む本をさがします。さがし方は大まかに次の3つの型に分けられます。

1. 作者型…この人が書いた本をもっと読んでみたい。つまり、その本の作者の別の本を読み進む型。私の場合、灰谷健次郎、八ッ塚実、星野富弘、中条一雄などです。
2. 作品型…この本と同じ系統の本をつっこんで読んでみたい。つまり、その本と同じ内容の本を読み進む型。私の場合、教育、ボランティア、体育、スポーツ、野外活動、自然観察などに関する本です。
3. シリーズ型…この本が入ったシリーズを全部読みたい。つまり、シリーズで発行された本を順番に読み進む型。

1冊の本を読んで感動しなかった人は、また別の本で始めるのです。さて、あなたはどの型ですか。

最後に、「読書が苦手だ」「読書はきらい」などと言う人がいますが、まだ感動できる本に出会っていないだけなのではないでしょうか。そのような人は私に連絡して下さい。かつて読書ぎらいだった私をのめりこませた、読みやすく、心あたたまる本を推薦します。（「新着図書10選」にも推薦図書をひとつあげておりますので、こちらもご覧下さい）

「読書のすすめ」

環境都市工学科

大東延幸



職業柄、論文や報告書の類いに目を通す機会は実に多い。だが、「読書らしい読書」は長くしていない様に思う。そこで「読書らしい読書」がなぜ必要なのかを考えてみた。

まず、読書の対象となる書物とは何だろうか。一般に小説を「読む」事を読書と呼ぶのには異論は無いと思うが、論文集や報告書を「読む」事を読書というには異論があるだろう。つまり、少なくとも活字を読む事によって知識や情報を得るだけでなく、フィクションであれノンフィクションであれ、著者の何らかの意図の下でストーリーがある必要はあるだろう。しかし報告書はともかく論文とは著者の学問的な意図の下で仮説から結論までのストーリーがあるものである。すると更に必要な事は、活字を読む事によってその情景が想像する事ができ、更にそうしなければならない事であろう。この点を満たす書物となると小説の類いとなる。

この点が「読書」する事の重要性だと思う。私は優れたマンガはそこら辺りの小説より優れたストーリーを持っていると思っているし、その様なマンガは是非読んでほしいと思っている。ただマンガが小説より劣っている点を敢えて挙げるとすれば、それは「絵」が付いているのでその情景を想像する事が無い事だと思う。現代はビジュアル社会である。自分が学生の時よりテレビのチャンネルの数は増えたとし、ビデオもはるかに身近になった。コンピュータゲームもリアルな立体画像になった。しかしその分、想像力を働かせる機会が減っているのも確かである。

技術者は単にその技術を使うだけでなく、その技術が周囲や社会の中でどの様な位置にあり、どの様な影響を及ぼすかを絶えず考えなければならない。そのためには自分が入手している情報のなかで、未知の状況を想像する能力が必要である。私は学生時代に読書が必要な理由がそこにあると考える。

「図書館利用のすすめ」

図書係長

板谷茂



私の読書といえば通勤電車の中で偏った分野の本を読む程度で、人に読書を薦める資格はなさそうです。しかし、どうしても薦めなければならなくなったので、最近、目からうろこが落ちる思いをしたこと。そして、図書館でこれを確認？したことを紹介して『図書館利用のすすめ』としたいと思います。

この図書だよりが発行される頃、スペースシャトルで向井千秋さんが二度目の宇宙飛行で話題となり、無重力状態の船内でゆらゆらと漂う姿がニュースとなっているでしょう。

何の本だったか、「シャトルが飛んでいる軌道上（地表から約400km、一方地球の半径は約6370km）は無重力ではなく、シャトルは放物線を描き地上へ落ちようとしている。そして、室内の人間も同じ速度で落ちているので、無重力のようになっている。」という内容だったと思います。

当然重力がないものだと思い込んでいたので自分なりに確かめようと、図書館で参考図書と呼んでいる本、物理学辞典、理科年表等を調べてみました。

◦万有引力の法則 $F = Gmm'/r^2$ (G =万有引力定数, m =一方の質量, m' =もう一方の質量, r =2点間の距離) 地球の中心点からシャトルの軌道までの距離 r が約7%大きくなるとそこは地表重力の約87%となる。

◦第一宇宙速度 = 7.9Km/s (水平にものを投げ地上に落ちないで地球を周回する衛星となる速度)
◦『人工衛星船内では万有引力と遠心力とコリオリの力が釣り合って無重力状態が実現される。』(物理学辞典改訂版培風館から引用, コリオリの力の説明は長くなるので各自調べてみてください。)

このように調べていると、自分も自然の法則を知ったような気持ちになります。これからも先入観にとらわれず、そして、知ることを楽しみたいと思っています。

在外研究員だより

「米国ボストン・
MIT滞在記」

環境都市工学科教授
小堀 慈久

マサチューセッツ
通りに面したMIT
(1863年創立)
の玄関



1997年10月から6ヶ月間、文部省在外研究員としてアメリカ合衆国マサチューセッツ州の州都、ボストンにあるマサチューセッツ工科大学(MIT)・工学部・土木環境工学科・地盤工学研究室に滞在したので報告する。

入国手続の為、一時デトロイトに立ち寄ったものの、日本(関西空港)を発って13時間、ボストンの上空にさしかかった時は現地時間で夜の8時頃であった。雲の間合から徐々に広がる金色の夜景は旅の疲れとこれから始まる不安とを一時忘れさせてくれた。

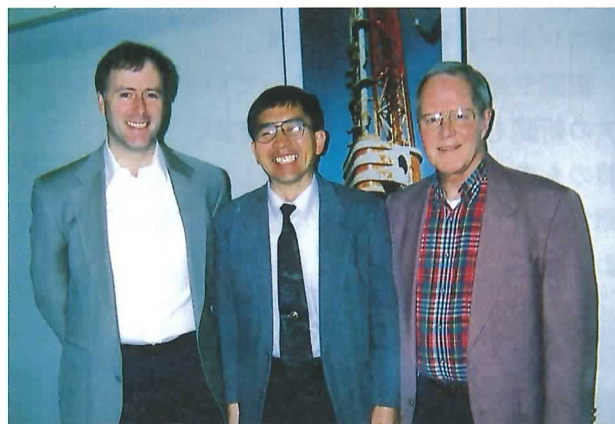
デトロイトのローガン国際空港にはこれからお世話になるMITのアンドリュ・J・ホイットルー(Andrew J. Whittle)教授と研究室の2人の学生が出迎えに来てくれた。

最初の1週間はIDカード(大学の身分証明書)作成から始まり、地盤工学の各教授への挨拶と大学内のガイダンス及びアパート探しと簡単な生活用品を買いそろえ等、多忙を極めたと同時に生活習慣の違いと言葉の壁に神経をすり減らした。それでもアパートを決め、電話の取り付け、銀行口座の開設等を終えて2週目からいよいよ大学での生活を始めた。先ず、権威ある教授達の研究室を再度訪れ講義の聴講と実験室の使用を申し出た。いずれの教授も好意的で私の下手な英語に耳を傾け、資料、文献の提供、実験室の使用を快諾してくれた。さらに技官を1名付ける事を申し出てくれた時は本当に感激した。この技官の方には公私

共に世話になった。私は4つの講義(大学院)に出席した、どのクラスも学生数は10~15名で無遅刻、無欠席、教授は学生に厳しく、質問に答えられないと別の問いをし、答えられるまで質問を繰り返す。すべての学生が当てられる。また、どの科目も多くの宿題が出される。放課後は卒研に明け暮れ夜間まで続く。学生はいつ遊ぶのか。教授からだけでなく学生からも多くの事を学んだ。

私も11月頃から実験を始め2月末まで行い、帰国直前の3月末によく小論文をまとめることができた。指導いただいたWhittle教授、Ladd教授、Germaine博士に心から感謝したい。

生活の場であるアパートは月額1450ドル(17万4千円)の5部屋もある家族用の贅沢なものとなった。ただし、これには水道代、暖房費が含まれていたので特に1月頃の厳冬期(現に気温 -10°C 以下の日が何日かあった。)には助かった。また米国の習慣として洗濯物は地下の洗濯室並べられている有料の洗濯機と乾燥機を使い行う。なぜ洗濯物を外に干さないのか隣の住人に尋ねた、すると彼は下着などのプライベートな物をなぜ他人に見せるのかと逆に聞いてきた。確かに!国民性の違いかどうか?私の場合は暖房で温室が 25°C もあったので部屋に紐を張り干した。一晩ですべてよく乾いた。寒さの厳しい異国で風邪もひかずに過ごせたのも24時間暖房と、ここでも豊かな国の恩恵に預かった事に感謝している。



右から、土質力学の世界的権威のC.C.Ladd教授、私、MITのホープで土質解析力学のA.J.Whittle教授

留学生の随想

「呉高専の図書館」

機械工学科5年

モハマド・アジズル

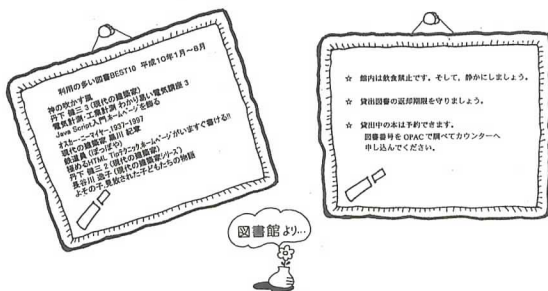


図書館…という言葉は世界中の人々が知っていると思います。その国々でいろいろな言葉が使われていますが、図書館の意味はみんな同じと考えています。マレーシアでは図書館のことを“PERPUSTAKAAN”といいます。名前は長いけれども同じことでしょう。

呉高専の図書館についてみると、私はとても便利だと思います。図書館では本ばかりではなくて、インターネットも使用することができます。“Technology”の発達のおかげです。インターネットは世界中につながるため、私は図書館でいつもマレーシアの情報を得てきました。毎日のようにインターネットからマレーシアの新聞を読むので、図書館は私にとって居間のようなものです。

呉高専の図書館にはLDプレーヤーもあります。私はアメリカ映画が一番好きなので、時々図書館で好きな映画を見ます。教科書に載っていないものを図書館で調べることができるので、友達と一緒にレポートを書いています。

新聞や雑誌も見せてもらっています。マレーシアの新聞も見ることができますが、二ヶ月ぐらい前のもので、できれば毎週新しいマレーシアの新聞“BERITA HARIAN”が読めれば良いと思います。



新着図書10選

「かぎりなくやさしい花々」

星野富弘著 偕成社

「読書のすすめ」に書いた、私が推薦したい本のひとつです。星野さんは私と同じ体育の教師でありながら、体操の指導中に着地に失敗し、手足の自由を失いました。その後、わずかに動く口に筆をくわえて詩画を描き続けています。この本はそういう作者の子ども頃から現在までを写真や詩画を入れてつづった手記で、誰にでもやさしい言葉をかけられそうな気持ちになる本です。

「忘れかけていた『心』を一気にとりもどしてくれた本です」「日本の次の世代を背負う人々に、ぜひ読ませたい貴重な精神的食糧と存じます」（読者感想文より）

（佐賀野 健記）

「医用工学シリーズについて」

コロナ社

本シリーズは全9巻である。初巻に医用工学の性格、医療への応用の現状と未来像を展望するとともに、医用工学者の必要性や医療機器のあり方を具体的に解説してある。第2、6、7、8巻では、診療専門別にME検査機器の生体情報処理やバイタルサインの伝送方式など多角的な診断システムについて述べてある。特に第3、4、5巻では、医用画像の技術的側面と臨床的側面から生体をイメージする機構を詳説してある。また第9巻では、磁界を利用した臓器の計測例と病气診断の効果についてまとめられている。

（岩本 英久記）

「戦後50年その時日本は」

NHK出版

1945年第2次大戦は終結しそれから50年という年月が流れた。日本は経済大国と呼ばれ、50年前の国の荒廃は歴史の一頁に過ぎなかったかのである。本書は、例えば国産乗用車、水俣、沖縄返還、列島改造、巨大企業誕生と公取委など「ある種の“事件”」を取りあげ、それを分析することで日本の戦後50年の政治経済のプロセスを判断する材料を私たちに提供している。生きた日本現代史と言えるのではないだろうか。

（周藤 剛士記）

「そして我が祖国・日本」

本多勝一著 すずさわ書店

この本が書かれたのは1975年、23年前だ。ずいぶん昔のことだ。しかしここに書かれている「我が祖国日本」の実態は20数年後の今日でも、心ある人たちが知らせ続けなければならないものばかりだ。開発の名の下に行われる破壊と収奪。奪われるのは広大な土地だけでない。その豊かな生産力やその土地に根付いた文化も同じ運命にさらされている。「美しい国土とは何か」をじわりじわりと読む者に問いかけてくる本だ。

(周藤 剛士記)

「図解でわかる「地球環境と私たちの生活」全8巻」

ばるぶ出版

美しい写真とやさしい図解を多分に用いて、地球環境についてわかりやすく紹介するこのシリーズ本は、以下の8巻からなる。「地球温暖化をふせごう」、「オゾン層の破壊をふせごう」、「酸性雨をふせごう」、「空気をきれいにしよう」、「水をきれいにしよう」、「食べ物を安全にしよう」、「リサイクルでゴミをへらそう」、「自然とともに生きよう」。ちょっとした時間に気軽に楽しめるヴィジュアル系の図書です。

(山口 隆司記)

「絵でわかる量子力学」

都筑卓司著 オーム社

「量子力学」とは原子や電子などの非常に微視的な対象を取り扱う物理学ですが、我々の生活と無縁なわけではなく、実は知らずに恩恵を受けていたりするのです。例えば、光通信で用いられるレーザーや光増幅ファイバー等がそれですが、みんな気にせずに電話回線として使っているのです。既に身近なはずですが、難しそうな名前がいけないようです。この本はそんなイメージを払拭する「量子力学」の入門書です。

(横沼 実雄記)

「こころの日曜日」

菅野泰蔵編 法研

医師でも教師でもない45人の「カウンセラー」が、いろいろな生き方や考え方を、実例を交えながら語りかけてくれます。目次を読むだけでも、心がほぐれ、元気が出てきます。

(学生相談室)

「自分を好きになる本」

バット・バルマー著 径書房

自分を好きになるということは、大人にとっても、子供にとっても難しいことです。ほめられることよりも、しかられることのほうが多い毎日。私たちはそんな自分に自信を失い、無力感に襲われます。でも誰だって、自分だけの輝きがあるのです。その輝きを見つけてください。

(学生相談室)

「トライボロジー」

山本雄二・兼田楨宏著 理工学社

トライボロジーは、摩擦、磨耗、潤滑など、相対運動を行う表面の諸問題を取り扱う学問分野である。本書はトライボロジーに関する基本的事項が、体系的に記述されている。特に、流体潤滑、弾性流体潤滑に関しては、各種潤滑理論が数式を用いてかなりくわしく解説しており、トライボロジストにとっても一読に値する。

(河野 正来記)

「電池のサイエンス」

岡田和夫著 森北出版

携帯電話にウォークマン、ビデオカメラにノートパソコン、とても便利な電気製品です。しかし、コンセントから電源を取れない以上、電源としての電池が必ず必要になります。この非常に身近で重要なのに、無くなった時位しか気にしてもらえない隠れた最先端技術である電池にスポットを当てた本です。学術知識よりは読み物に近い本なので気軽に読んでみて下さい。ところで、日本が乾電池技術で世界一なのを知ってました？

(横沼 実雄記)

「環境ホルモンー外因性内分泌攪乱化学物質問題に関する研究班中間報告書」

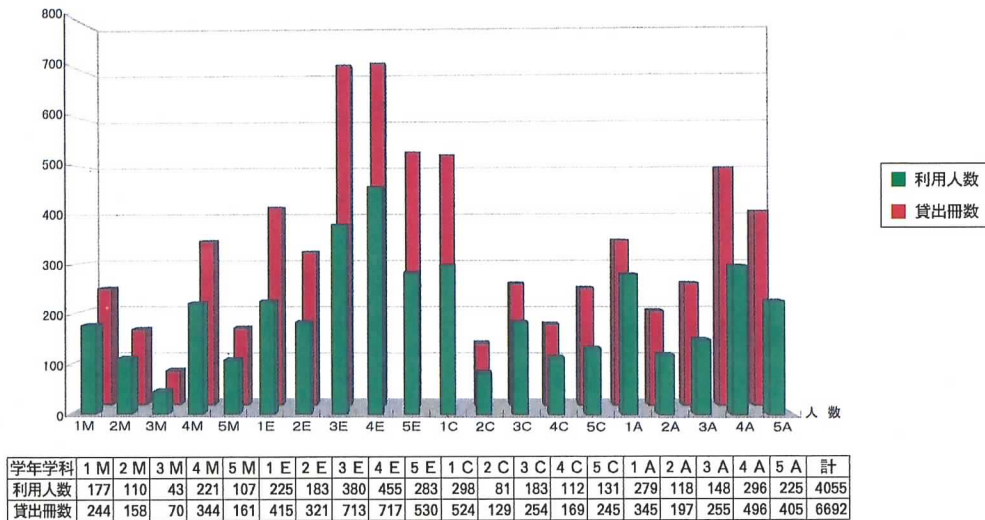
環境庁リスク対策検討会【監修】、環境新聞社

本書は、現在テレビをにぎわしている外因性内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）の問題に関する環境庁研究班の中間報告であり、以下の章より構成される。第1章環境ホルモン問題の概況、第2章環境ホルモン問題の既往の報告、第3章内分泌攪乱のメカニズム、第4章国際的取組の状況、第5章環境ホルモン問題の考え方、第6章今後の課題。環境ホルモンに関する本は種々出版されているが、本書も一見である。

(山口 隆司記)

お知らせ

1. 平成9年度図書館利用状況



2. 蔵書コーナー『学生相談室コーナー』の開設について

図書館の中央書籍棚にある『就職コーナー』と並んで『学生相談室コーナー』が設けられました。新着図書で紹介しています「自分を好きになる本」、「こころの日曜日」など心がほぐれる本がありますので、ぜひ利用してください。

3. 外国雑誌目次データベースのバージョンアップについて

呉高専図書館ホームページで検索できる外国雑誌目次データベースの検索システム（長岡技術科学大学提供）をバージョンアップしました。

主な追加機能

- 論文キーワード検索
- 著者名検索
- ダウンロード用データの提供
- 収録雑誌タイトルのアルファベット一覧 等

4. 一般公開実施規則の改正について

呉高専図書館は平成5年度から一般の方々に図書館を公開していますが、このたび同規則を改正し、館外貸出（3冊，7日以内）を開始しました。

詳細については、図書係へお問い合わせ願います。

電話 内線：8406， 外線：0823-73-8406（平日 17:00まで）

E-Mail：tosh@kure-nct.ac.jp URL：http://www.lib.kure-nct.ac.jp/libhome.html

編集後記

図書館では、今年度に入り現在160冊程度の新刊を購入しています。特に今年度は、専門図書ばかりではなく、カウンセリング関係の図書も18冊程度購入しました。最近少し元気がない…あるいは、自信が…と感じていたら、これらの図書を手に取って見るのもいかがでしょうか？

また、今年度より本校に専攻科が設置され、本科でも創造演習という新しい授業が始まりました。

5年生の就職活動も例年になく厳しいようです。学生諸君は、これまで以上に自主的に学習して行くことを求められています。そのために図書館を大いに活用し、入館者数・貸出冊数ともに益々増えていくことを期待しています。

（図書館長補 中迫 正一）